

ときの玉手箱

彦根城博物館からのメッセージ



第344回

ながの しゆ ぜん 長野主膳の自筆日記―安政の大獄の現場―

江戸時代末期、幕府内や諸大名、朝廷関係者らの政治的対立から、安政五年（一八五八）九月から約一年間、多くの反幕府派が逮捕・投獄されました（後に安政の大獄と呼ばれる）。対象となった人物は、井伊直弼らと対立する大名や幕府関係者だけでなく、朝廷関係者も多く含まれました。

国学者で彦根藩士の長野主膳（義言）は、井伊直弼の命を受け、京都情勢の探索や朝廷への裏工作のため上京し、安政の大獄に深く関与したことが知られています。

長野は、京都にいる安政五年九月から翌年五月まで、日記を書いています。また（写真、彦根藩井伊家文書）。「秘中要記」と題されたこの日記には、誰と会い何を話したかなど、文書に残らない会談も含めた長野の日々の活動が記録されています。安政の大獄で、誰が逮捕されどのような処罰であったかといった、基本的な事実関係は他の彦根藩井伊文書などからわかりますが、「秘中要記」からはその舞台裏が見えてきます。

さて、六物空万という人物の事例から、長野の活動を見てみましょう。六物は大覚寺門跡に仕えた人で、医学や天文学などを修めていました。安政五年十月、六物が彗星を占い、これは彦根藩が天皇を廢そうとする前兆だと朝廷に上申したとの情報が長野の耳に入り、これが長野から朝廷との交渉のため上京していた間部詮勝（老中、鯖江藩主）に、さらには井伊直弼にも伝えられ、幕府による捜査が始まります。十一月、六物は幕府役人に逮捕され尋問を受け、翌年二月に江戸へ移送、十月に幕府評定所にて遠島を申し付けられましたが、翌月に獄中で病死しました。

長野が情報を問部らに伝えたことが六物逮捕に繋がったわけですが、彼は情報をどのように得ていたのでしょうか。「秘中要記」九月二十六日条に「島田龍章が言うには六物という富小路（公家）の関係者らしき者が星を占って朝廷へ言上している」とあり、長野はこの時点で六物の行動を知ったことがわかります。

島田は九条家（公家）の家臣です。六物逮捕後の十一月十三日、朝子（御所の女官）に仕える亀尾（村山たか）が長野のもとに来て、朝廷内での甫子（天皇の乳母）と富小路敬直が六物逮捕をめぐって交わした会話の内容を伝えました。長野は朝廷内部の協力者から情報を得ていたのです。

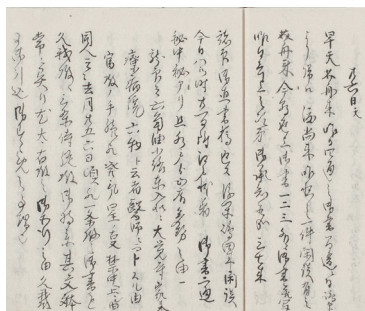
同月十四日、渡辺金三郎（京都西町奉行所与力）から、彦根藩が天皇を廢そうとしている話は六物が富小路や大覚寺門跡に提出した文書には見当たらない、との情報が届きます。十二月十一日には島田と芥川舟之（鯖江藩士）から、二十二日には渡辺から、六物の取調書が届けられています。幕臣や諸藩の藩士からも情報が長野のもとに集まってくる様子が見て取れます。十一日条には「六物一件考意のこと」とあります。詳細は不明ながら、長野は逮捕後も六物の取調べを注視していたようです。

このように、長野は様々な情報網を持ち、密に連携を取りながら活動したのです。「秘中要記」は、長野

の京都での行動の実態がわかり、また当時の政治の動向もうかがえる、大変重要な史料なのです。

なお、「秘中要記」は『大日本維新史料 井伊家史料』十七・十八巻にて活字化されています。

【彦根城博物館学芸員 荒田雄市】



写真「秘中要記」（当館蔵）
表紙・9月26日部分

